

飯館村調査報告

アグリコクーンの企画の一環で被災した福島県飯館村を訪れ、ふくしま再生の会の活動を見学した。ふくしま再生の会では各分野で活躍していた、あるいは現在活躍中の方々が有志で集まって汚染状況の把握、除染実験を行なっている。印象に残った結果は、以下の3つ。

- 1.水田に水を張っておくと、居住地に届く線量が低減される。
- 2.斜面が平坦になる変曲点の付近に放射線物質を吸着した粘土が溜まりやすい。
- 3.農地の表面の層を削って集めたものを地下 0.5~1m に埋めることで農地を効果的に除染

でき、汚染物質を安全に封じ込められる。

ふくしま再生の会の方々は、放射線による汚染がどの程度進んでいるのか、また、どうすれば既に放射線により汚染された農地や居住地を除染できるかという疑問について答えを出そうとし、いくつかの事実を明らかにしている。これは本当に素晴らしいことで、このような先輩方を見習って生きるいくべきだと思った。しかし、被災地で人々が再び安心して暮らせるようにするためには、低線量の放射線を長期間にわたって浴び続けた場合、人体に悪影響があるのかどうか、あるとしたら、それはどのようなものかという疑問に答えを出しておかなければならない。この疑問に取り組もうという意識はまだ現場にないようであった。研究は動物から得られた結果を外挿して進めていくのだろうが、野生動物からサンプルを回収する専門家と、安定したデータを蓄積していく上で実験動物の利用が欠かせない。実現するには、ボランティアの方々にすべてを任せるのではなく、大がかりな予算と大学や政府の研究機関の介入が必要になってくるのではないか。

原子力発電は安価で安定してエネルギーを供給できる。大地震に続発した事故が起きたため、日本では今後新しい原子力発電所が設置されることはなくなるであろうし、最終的には廃止されるのかもしれない。それでも、世界規模でみればその数はまだまだ増大していくものと予想される。当然のことだが、件数が増えれば増えるほど事故が発生する確率も高くなる。いつかどこかで事故が起こる日はそう遠くないだろう。実際、今回の事故以降、世界の保有総数全体に対する重大事故の頻度は30年に1度と計算されるようになった。次に同じ事態が起こったときのためにも、今回の事故現場からできるだけ多くの情報と教訓を引き出しておく必要がある。

あの地震以来、原子力発電の是非や建設を進めてきた人間に対する責任の追求について世間で騒がれているが、私は一種の諦めのようなものに陥って、それらに関してよく知ろうとすらしていなかった。ところが、被災地を訪れても大変なことが起きたのだと改めて実感することはなかった。それはおそらく、私がそこに住んでいなくて、とくにそこで子供を授かることがないからだだろう。私の家族が被災地に住んでいたら、どうだろう？もし、そこで子供を授かったらどうするだろう？科学と無縁ではない大学院生の私でも、間違いなく生活の拠点をどこか遠くへ移す。安全でないという十分な科学的根拠もないけれど、安全だという十分な根拠もなく、不安で仕方ないから。「危険性のある施設を作るときに、近隣住民に安全でないことを証明してみろというのはおかしいと思わないか？作る側が安全であることを証明すべきだろう。」と誰かが言っていたのを思い出した。